

共感性プロセス尺度の変化を指標とした  
学部公認心理師候補生による試行カウンセリングに関する一考察  
A Study of Trial Counseling by Undergraduate Licensed Psychologist Candidates  
as Outcome-measures of Shifts in Empathetic Process Scales.

若狭 和真 / 押岡 大覚

聖泉大学人間学部

WAKASA, Kazuma / OSHIOKA, Daisuke Ph.D.

Seisen University, Faculty of Human Studies

要 約

本研究では、共感性プロセス尺度（葉山・植村ら，2008）によって測定される共感性の変化を、聴き手の成長の指標とした学部公認心理師候補生によるオンライン形式の試行カウンセリングについて、スーパービジョンの介入効果という視点から検討することを目的とした。公認心理師養成を目的とした学士課程の専門演習（ゼミ）に所属する筆者を含めた3名で、筆者を聴き手とした試行カウンセリングを実施した。15回の試行カウンセリングを「初期」、「中期」、「後期」に分けて、共感性プロセス尺度を構成する4因子それぞれについてフリードマン検定を施し、また効果量を算出した。その結果、仮説1から仮説4それぞれの一部が支持された。結びとして、本研究が自己評定に基づく分析・考察を行っていることに言及し、研究結果や考察が臨床心理スーパービジョンの経験一般に当てはまるとは言い切れないことについて述べた。

キーワード：共感性プロセス 試行カウンセリング 臨床心理士 公認心理師  
スーパービジョン フリードマン検定 効果量

## 1. 問題意識と目的

日本では、心の専門家の代表的な資格として 1988 年から認定が開始された民間資格である臨床心理士が存在している。一方で、心の専門家として社会的信頼がより高い国家資格である公認心理師の資格を定めた法律「公認心理師法」が 2015 年に制定され、2018 年に第一回公認心理師国家試験が実施された。公認心理師法が制定されるに至った経緯等については紙面の都合で割愛する。政策形成やその決定過程については、丸山 (2016) 他を参照されたい。

さて、国家資格である公認心理師が誕生するに至った背景には、我が国におけるメンタルヘルスの問題も関与していると推察される。警察庁 (2021) によると、国内の総自殺者数は 1998 年から 2011 年までは 13 年連続で 3 万人を超えていた。これに対して、2016 年には自殺対策基本法の改正があり、また、2017 年には自殺総合対策大綱がそれぞれ制定された。2009 年から 2019 年にかけて国内の総自殺者数連続で減少しているが、2020 年の総自殺者数は増加に転じている現状にあり、未だ年間 2 万人を超える自殺者が存在する。さらに、2019 年末頃から世界規模で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の感染拡大によるメンタルヘルスへの影響にも触れておきたい。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、それまでの対面による直接的な交流のありようが制限され、オンラインでのコミュニケーションが急速に発展した。コミュニケーションのあり方は急激に変化し、人々は時々刻々と変化する環境への適応を求められる状況にある。

心の専門家である公認心理師を目指す心理学徒の一人として、今後さらに心の専門家に対する支援のニーズが高まると予想すると同時に、時代に対応させた教育・訓練のあり方を検討する必要があるのではないかと考えている。とりわけ、心理専門職者養成の実践的な訓練としてのロールプレイや試行カウンセリングの継続経験は、後の臨床場面における礎を築くものであると考えられている。ロールプレイや試行カウンセリングでは、被訓練者が「聴き手」の役割を演じて、「話し手」役割者の語りに耳を傾ける。時には「観察者」も含めた模擬心理面接場面を経験する。このときに重要なことは、「聴き手」、「話し手」、「観察者」による模擬心理面接の場面を経験するだけでなく、臨床心理士・公認心理師資格を有する上級の心理専門職者からのスーパービジョンを併用することである。

平木 (1997) によれば、スーパービジョンとは「スーパーヴァイザーがスーパーヴァイジーに対して一対一で、臨床実践上のアセスメントと介入の具体的方法について、時間と構造を定めて、継続的に教育・訓練を行うこと」である。本研究では実践的な訓練として

スーパービジョンを併用したオンライン形式での試行カウンセリングに焦点を当てる。学部公認心理師養成候補生に対する初期教育・訓練の方法として、スーパービジョンを併用したオンライン形式での試行カウンセリングを取り上げる理由は、先にも触れた新型コロナウイルス感染症の感染拡大による人と人との交流様式の変化が挙げられる。様々なオンラインサービスが普及しているなか、今後、心理支援の現場においてもオンライン形式での心理支援が積極的に取り入れられる可能性は十分に考えられる。エンドユーザーのニーズに対応するために、心理専門職の養成課程においても従来型の対面による心理支援に関する実践的な訓練とともに、オンライン形式での心理支援に関する実践的な訓練も実施することが必要であると考えられる。オンラインでの心理支援に関する需要の高まりが予想されることから、心理専門職者養成の初期段階—学士課程からオンライン形式での試行カウンセリング経験も必要であると考えられる。

スーパービジョンを併用したオンライン形式での試行カウンセリングに関する成長の指標として、本研究では共感性の変化に着目した。櫻井・村上 (2015) は、共感性に関する多くの先行研究にあたり、共感性研究の潮流を概観している。そこでは、共感性研究には認知的側面を重視する流れと、感情的側面を重視する流れが存在していたことを指摘している。そして、共感性研究に関する近年の流れにも触れ、認知的側面と感情的側面の両方から共感性を捉える枠組みがスタンダードになっていることを述べている。一方、中妻・サトウ (2017) は、心理学における共感に関する研究の動向についてまとめ、心理尺度によって共感のあり方を捉えるに至るまでの時間的展開をまとめている。さらに、中妻・サトウ (2018) においては、共感のあり方を測定するための尺度開発について、精神分析および臨床心理学の側面から時間的展開をまとめている。

以上から、共感あるいは共感性のあり方を測定する尺度として、本研究では葉山・植村ら (2008) による「共感性プロセス尺度 (*Empathetic Process Scales*)」を用いることとした。この共感性プロセス尺度は、先に触れた共感の認知的側面と感情的側面のどちらも捉えることが可能な尺度であり、それらを測定するために「他者感情への敏感性」、「視点取得」、「感情の共有」、「他者志向的反応」と命名された4つの下位尺度から構成されている。「他者感情への敏感性」は、他者の感情に関心を持ち、注意を向けることができているかを測定する下位尺度である。「視点取得」は、相手の立場に立って、相手の感情を理解できているかを測定する下位尺度である。「感情の共有」は、他者のポジティブな感情とネガティブな感情に対しての自己志向的反応、すなわち、相手が置かれている立場や状況が言

葉で理解できれば、そこに自分を当てはめることで感じるができるという共感を測定する下位尺度である。「他者志向的反応」は、他者のポジティブな感情とネガティブな感情に対しての他者志向的反応、すなわち、目の前の相手の表情や感情を直感的に感じ取り、知覚した情動に対してそのままの共感を測定する下位尺度である。

この共感性プロセス尺度を変化の指標としてスーパービジョンを併用したオンライン形式での試行カウンセリングにおける変化・成長を捉えようとする中で、どのようなプロセスを経て聴き手の“共感する能力”が成長したかを把握することが可能となる。

以上から、本研究では共感性プロセス尺度（葉山・植村ら，2008）によって測定される共感性の変化を、聴き手の成長の指標とした学部公認心理師候補生によるオンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョンの介入効果について検討することを目的とする。

## 2. 仮説

仮説1：オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第一因子の「他者感情への感性」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意に高くなると予想される。また、「他者感情への感性」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測される。

仮説2：オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第二因子の「視点取得」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意に高くなると予想される。また、「視点取得」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測される。

仮説3：オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第三因子の「感情の共有」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意に高くなると予想される。また、「感情の共有」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測される。

仮説4：オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第四因子の「他者志向的反応」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意な変化は見られないと予想される。また、「他者志向的反応」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られることはないと予測される。

### 3. 方法

#### 3.1 参加者

本研究では、公認心理師等の心理専門職者養成を目的とした学士課程の専門演習(ゼミ)に所属する筆者を含めた3名(男性1名 女性2名)で試行カウンセリングを行った。研究対象者は筆者であり、他2名は話し手、観察者の役割を執った。筆者を含めた3名は、3年次から臨床心理士・公認心理師の資格を持ち、また、*The International Focusing Institute* 認定 *Focusing Trainer* 資格を持つ指導教員(以下「指導教員」という。)のもとで、週1回90分、主にフォーカシング指向心理療法に関する対面式での教育・訓練を受けていた。

#### 3.2 使用尺度

共感性プロセス尺度(葉山・植村ら, 2008)を用いた。この尺度は、共感性を構成する「他者感情への敏感性」、「視点取得」、「感情の共有」、「他者志向的反応」の4つの下位尺度から構成されており、各質問項目に対して「まったく当てはまらない(1点)」から「とても当てはまる(5点)」の5件法での回答を行った。

#### 3.3 実施方法

オンライン形式での試行カウンセリング(以下「試行カウンセリング」という。)を実施した期間は2022年2月上旬から5月下旬であった。1回50分の試行カウンセリングを週に1回の頻度で実施し、合計15回行った。試行カウンセリングの回数は、厚生労働省(2009)の「うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル」を参考にした。

試行カウンセリングでは、筆者が「聴き手」となり、他2名は「話し手」、「観察者」の役割を執った。参加者3名が揃った時点で、面接内容の録画・録音に関する同意を得た。面接の導入において、「聴き手」である筆者は話し手に対して「面接時間は50分間です。自由に話をしてください」と伝えた。試行カウンセリングの際、「聴き手」である筆者はRogers, C. R. (1957)が提唱した聴き手としての態度条件である「共感的理解」、「無条件の肯定的関心」、「自己一致」を含む指導教員によるフォーカシング指向心理療法に関する面接訓練経験に基づいた臨床的関与と具体的介入を行うように努めた。面接終了後、zoomを繋げたまま、筆者は共感性プロセス尺度の評定を行った。なお、聴き手である筆者は、試行カウンセリング第一セッション直前の2月上旬に、指導教員から試行カウンセリングの導入等に関するスーパービジョンを受けた。また、聴き手は一回の試行カウンセリング毎に、次の面接までの間に指導教員から個別にスーパービジョンを受けた。

### 3.4 分析方法

15回の試行カウンセリングを、「初期（1～5回）」、「中期（6～10回）」、「後期（11～15回）」に分けて、共感性プロセス尺度を構成する4因子それぞれについてフリードマン検定を行い、スーパービジョンによる介入効果の有無についての判断を行った。また、共感性プロセス尺度を構成する4因子の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれについて、スーパービジョンによる介入効果の程度を確認する目的から、推定効果量 (*Effect Size Estimate*) を算出した。本研究では山田 (2020) および竹林 (2021, 2022) を参考に、単一事例データに用いられる効果量のなかでも頑健性が高いとされる IRD (*Improvement Rate Difference*; Parker et al., 2009) を算出した。算出した推定効果量 IRD の評価には、以下、表 1 に示した Parker et al. (2011) による判定基準を用いた。なお、フリードマン検定には統計解析ソフト *Social Survey Research Information Co., Ltd., BellCurve for Excel* (ver.4.02) を用いた。また、効果量の算出には *Single-case Effect Size Calculator* (Pustejovsky et al., 2022) を用いた。

表 1 推定効果量 IRD の判断基準

推定効果量	評価基準
$IRD > 0.70$	大きな効果 ( <i>large effect</i> )
$0.50 \leq IRD < 0.70$	適度な効果 ( <i>moderate effect</i> )
$IRD \leq 0.50$	小さな / 疑わしい効果 ( <i>small / questionable effect</i> )

本来の単一事例研究 (*single-case research*) では、「ベースライン期」と呼ばれる臨床的介入を行う前の時期を設定し、平時のデータを測定した上で介入後との比較を行う。本研究においても、試行カウンセリングの「初期」をベースライン期として設定し、「聴き手」と指導教員によるスーパービジョンは行わず、「中期」からのスーパービジョンが求められよう。しかし、「聴き手」と「話し手」との間では試行カウンセリングの「初期」から臨床的接触が展開されており、「話し手」の利益を最優先と考え、「聴き手」に対するスーパービジョンは「初期」から必須であると考えた。以上、臨床的介入研究における倫理的観点

から、本研究ではスーパービジョンを併用した試行カウンセリングの1回目から5回目にあたる「初期」をベースライン期と仮定し、得られたデータに対する統計的処理を施すこととした。

#### 4. 結果と考察

共感性プロセス尺度を構成する各因子に関する「初期」、「中期」、「後期」の記述統計量を以下、表2に示した。また、以下表3にはフリードマン検定の結果を、表4には推定効果量IRDの結果をそれぞれ示した。

表2 記述統計量

因子	初期		中期		後期	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
他者感情への 敏感性	3.24	0.74	4.40	0.22	4.60	0.18
視点取得	3.32	0.41	3.96	0.29	4.24	0.27
感情の共有	3.46	0.37	4.06	0.08	4.38	0.10
他者志向的反応	3.46	0.19	3.56	0.15	3.74	0.05

表3 フリードマン検定の結果

因子	初期－中期		中期－後期		初期－後期	
	差	<i>p</i> 値	差	<i>p</i> 値	差	<i>p</i> 値
他者感情への 敏感性	1.16	0.30	0.20	0.85	1.36	< 0.05 *
視点取得	0.64	0.60	0.28	0.94	0.92	0.26
感情の共有	0.60	0.29	0.32	0.73	0.92	< 0.05 *
他者志向的反応	0.10	0.88	0.18	0.88	0.28	0.43

表4 推定効果量IRDの結果

因子	初期－中期		中期－後期		初期－後期	
	IRD	判定	IRD	判定	IRD	判定
他者感情への 敏感性	1.00	大きな効果	0.40	小さな効果 疑わしい効果	1.00	大きな効果
視点取得	0.80	大きな効果	0.40	小さな効果 疑わしい効果	0.80	大きな効果
感情の共有	0.60	適度な効果	0.50	適度な効果	0.90	大きな効果
他者志向的反応	0.30	小さな効果 疑わしい効果	0.30	小さな効果 疑わしい効果	0.50	適度な効果

仮説1では、オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第一因子の「他者感情への敏感性」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意に高くなると予想した。また、「他者感情への敏感性」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測した。

試行カウンセリングの「初期」、「中期」、「後期」を独立変数、「他者感情への敏感性」得点を従属変数としてフリードマン検定を行った結果、「初期－中期」での有意差は認められず ( $p < .30$ )、また「中期－後期」での有意差も認められなかった ( $p < .85$ )。しかし、「初期－後期」の間に5%水準で有意差が認められた ( $p > .05$ )。一方、「他者感情への敏感性」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期－中期」の推定効果量IRDを算出した結果、大きな効果が確認された ( $IRD = 1.00$ )。また、「他者感情への敏感性」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「中期－後期」の推定効果量IRDを算出した結果、小さな/疑わしい効果が確認された ( $IRD = .40$ )。さらに、「他者感情への敏感性」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期－後期」の推定効果量IRDを算出した結果、大きな効果が確認された ( $IRD = 1.00$ )。以上から、仮説1の一部が支持された。

ここからは「他者感情への敏感性」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、主に「初期－後期」から得られた効果量の結果に基づいた考察を述べることにする。

「他者感情への敏感性」に関する「初期」のスーパービジョンでは、話し手が語る「〇〇かなあ〜…」や「〇〇な感じ…」等の言いよどみや曖昧な雰囲気や濁している表現に着目することの重要性や、キーワード・キーフレーズの繰り返し (*reflection*; Rogers, 1942) を行うことの重要性についての気づきがあった。また、語りの途中にある「も」、「が」、「と

か)、「けど」、「でも」などに関心を寄せ、話し手に、例えば「不安があるのですか？それとも不安もあるのでしょうか？」などと確認してみることの必要性についての助言があった。これらの助言があった背景には、聴き手が話し手の感情や本心の理解に資する視点が不足していたり、語られた内容の細部にも積極的な関心を向けることの重要性について理解が不足していたりしたことが考えられる。

「中期」のスーパービジョンでは、話が広がりそうな適切なタイミングでキーワードを繰り返すことができるように、また、話し手の感情が動いたと感じられる言葉が話し手の語りから出たときに注意を向けられるようになることを意図した指導教員からのコメントがあった。

「中期」を経て「後期」のスーパービジョンでは、先に述べた「初期」のスーパービジョンでの助言にあった、話し手の言いよどみや曖昧な雰囲気や濁している表現への着目、キーワード・キーフレーズの繰り返しが適切に行われているかについての振り返りを行った。それと同時に、これらを実践することで他者の感情に対する関心の持ち方や、注意の向け方がどのような形で好転機会に結びついたかについて、指導教員からのコメントがあった。試行カウンセリングが「後期」に入った頃には、聴き手が話し手の発言に単に耳を傾けるだけでなく、話し手の感情理解に資する姿勢を体得することで、他者の感情に関心を持ち、注意を向けることができてきた感覚が筆者のなかに生まれていた。以上のようなスーパービジョン経験の積み重ねにより、第一因子「他者感情への敏感性」に関する「初期-後期」のあいだで大きな効果という効果量の変化が得られたと考えられる。

仮説2では、オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第二因子の「視点取得」得点は、面接の「初期-中期」、「中期-後期」、「初期-後期」それぞれで有意に高くなると予想した。また、「視点取得」に関する効果量は、特に「初期-後期」の間で大きな効果が得られると予測した。

試行カウンセリングの「初期」、「中期」、「後期」を独立変数、「視点取得」得点を従属変数としてフリードマン検定を行った結果、「初期-中期」( $p < .60$ )、「中期-後期」( $p < .94$ )、「初期-後期」( $p < .26$ )のそれぞれについて有意差は認められなかった。一方、「視点取得」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期-中期」の推定効果量IRDを算出した結果、大きな効果が確認された( $IRD = .80$ )。また、「視点取得」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「中期-後期」の推定効果量IRDを算出した結果、小さな/疑わしい効果が確認された( $IRD = .40$ )。さらに、「視点取得」を標的

指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期－後期」の推定効果量 IRD を算出した結果、大きな効果が確認された ( $IRD = .80$ )。以上から、仮説 2 の一部が支持された。

ここからは「視点取得」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、主に「初期－後期」から得られた効果量の結果に基づいた考察を述べることにする。

「視点取得」に関する「初期」のスーパービジョンでは、話し手の語りのなかで、聴き手が共有しにくいと感じたことをそのままにして面接を進めるのではなく、聴き手が確認の意図を込めて話し手に問いかけることの必要性についての気づきがあった。例えば、「不安と感じられた理由についてもう少しお話ししていただくことはできそうですか？」といった問いかけである。また、面接における聴き手の存在は、話し手から見てどのように映っていたか、例えば、話し手の想いのなかには、“聴き手は私のことをどういうふうには評価しているのかなあ…”といった考えが存在していることが想定される。そこには心配や不安、気がかりといった感情を抱いている可能性があり、聴き手としてそこに想いを馳せることも重要であるとの示唆を得た。これらの助言があった背景には、聴き手が話し手の語りについて、わからないと感じているのにそのまま面接を進めることの危険性についての認識が不足していたことが考えられる。ここでの危険性とは、相手の立場からズレた視点を持ってしまい、聴き手と話し手の間に“距離”が生じてしまうことであり、これを防ぐためにも問いかけをし、ズレを確認することが必要であると考えられる。

「中期」のスーパービジョンでは、「初期」と同様に聴き手と話し手の間に“距離”が生じているかもしれない場面で適切な問いかけができるように、また、聴き手に対する話し手の心配や不安、気がかりといった相手の感情に思いを馳せることができるようになることを意図した指導教員からのコメントがあった。

「中期」を経て「後期」のスーパービジョンでは、先に述べた「初期」のスーパービジョンでのアドバイスにあった、相手の立場からズレた視点を聴き手が持っていそうなときに問いかけをすることや、話し手の立場に立った聴き手に対する感情の理解が適切に行われているかについての振り返りを行った。それと同時に、これらを実践することで相手の立場に立って、相手の感情を理解することが話し手の自己理解にいかんとして結びついたと考えられるか等について、指導教員からコメントがあった。試行カウンセリングが「後期」に入った頃には、画面越しではあるものの目の前にいる話し手がどのようなことを思い、考えながら話しているかについての想像を働かせながら、聴き手として寄り添って関わる

ことができてきた感覚が筆者のなかに生まれていた。以上のようなスーパービジョン経験の積み重ねにより、第二因子「視点取得」に関する「初期－後期」のあいだで大きな効果という効果量の変化が得られたと考えられる。

仮説3では、オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第三因子の「感情の共有」得点は、面接の「初期－中期」, 「中期－後期」, 「初期－後期」それぞれで有意に高くなると予想した。また、「感情の共有」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測した。

試行カウンセリングの「初期」, 「中期」, 「後期」を独立変数, 「感情の共有」得点を従属変数としてフリードマン検定を行った結果, 「初期－中期」での有意差は認められず ( $p < .29$ ), また「中期－後期」での有意差も認められなかった ( $p < .73$ )。しかし, 「初期－後期」の間に5%水準で有意差が認められた ( $p > .02$ )。一方, 「感情の共有」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について, 「初期－中期」の推定効果量  $IRD$  を算出した結果, 適度な効果が確認された ( $IRD = .60$ )。また, 「感情の共有」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について, 「中期－後期」の推定効果量  $IRD$  を算出した結果, 適度な効果が確認された ( $IRD = .50$ )。さらに, 「感情の共有」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について, 「初期－後期」の推定効果量  $IRD$  を算出した結果, 大きな効果が確認された ( $IRD = .90$ )。以上から, 仮説3の一部が支持された。

ここからは「感情の共有」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について, 主に「初期－後期」から得られた効果量の結果に基づいた考察を述べることとする。

「感情の共有」に関する「初期」のスーパービジョンでは, 話し手が置かれた立場や状況というものを言葉にしてもらうための雰囲気作りや具体的な関与の重要性についての気づきがあった。このような気づきの背景には, 「初期」の頃の筆者は相手の語りに耳を傾けることに注力していたが, それだけでは共有できていない相手の立場や状況が多くあるということについて指導教員とのやり取りで気づきを得たことが考えられる。

「中期」のスーパービジョンでは, 話し手の語りのなかで違和感を覚えた点に, 話し手の立場や状況を理解するとき手がかりとなるより豊かな語りを促すための問いかけができるようになることを意図した指導教員からのコメントがあった。

「中期」を経て「後期」のスーパービジョンでは, 先に述べた「初期」のスーパービジョンで気づきを得た, 聴き手が相手の状況や立場がわからないときに, 話し手に語りを促すような問いかけができているかについての振り返りを行った。それと同時に, これを実

践することで相手が置かれている立場や状況を言葉で理解し感情を共有することにどのような形で結びついたかについて、指導教員から評価を受けた。試行カウンセリングが「後期」に入った頃から、聴き手のなかに生じた、違和感や、わからない、理解できないといった感覚を頼りに、相手に尋ねることで、より豊かな語りを話し手ができるように促すようにした。その結果、立場や状況について話し手から言葉にしてもらうことが可能になり、そこで事実を含めた豊かな感情の共有といったものができてきたという感覚が筆者のなかに生まれたのではないかと考えられる。以上のようなスーパービジョン経験の積み重ねにより、第三因子「感情の共有」に関する「初期－後期」のあいだで大きな効果という効果量の変化が得られたと考える。

仮説4では、オンライン形式の試行カウンセリングに対するスーパービジョン経験によって、第四因子の「他者志向的反応」得点は、面接の「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれで有意な変化は見られないと予想した。また、「他者志向的反応」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られることはないと予測した。

試行カウンセリングの「初期」、「中期」、「後期」を独立変数、「他者志向的反応」得点を従属変数としてフリードマン検定を行った結果、「初期－中期」( $p < .88$ )、「中期－後期」( $p < .88$ )、「初期－後期」( $p < .43$ )のそれぞれについて有意差は認められなかった。一方、「他者志向的反応」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期－中期」の推定効果量 IRD を算出した結果、小さな／疑わしい効果が確認された ( $IRD = .30$ )。また、「他者志向的反応」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「中期－後期」の推定効果量 IRD を算出した結果、小さな／疑わしい効果が確認された ( $IRD = .30$ )。さらに、「他者志向的反応」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、「初期－後期」の推定効果量 IRD を算出した結果、適度な効果が確認された ( $IRD = .50$ )。以上から、仮説4は支持された。

ここからは「他者志向的反応」を標的指標としたスーパービジョンの介入効果について、主に「初期－後期」から得られた効果量の結果に基づいた考察を述べることとする。

「他者志向的反応」に関する「初期」のスーパービジョンでは、話し手の表情や語る言葉の雰囲気や聴き手の表情や応答の雰囲気を合わせることで、面接の場に必要と考えられる安心感や情緒的交流の雰囲気を醸成することの重要性についての気づきがあった。また、面接中の沈黙の取り扱いについても示唆を得た。これらは、例えば、話し手が言葉の雰囲気や語尾を曖昧にするようであれば、聴き手の応答も雰囲気を合わせた関わりをするとい

ったものである。このようなアドバイスがあった背景には、面接の場で話し手の表情や語る言葉の雰囲気や聞き手の表情や応答の雰囲気を合わせることの重要性についての理解が不足しており、また、沈黙の取り扱いが分からず、沈黙を不用意に破るなどの聞き手中心の発言が見られたことが考えられる。

「中期」のスーパービジョンでは、話し手が纏っている雰囲気はどこから来るものなのか想像を膨らませながら話を聞けるように、また、沈黙を適切に取り扱い、そこから話し手の感情理解に繋がられるようになることを意図した指導教員からのコメントがあった。

「中期」を経て「後期」のスーパービジョンでは、先に述べた「初期」のスーパービジョンでの指導内容にあった、話し手の雰囲気や聞き手の雰囲気を合わせることや、沈黙の取り扱いが適切に行われているかについての振り返りを行った。それと同時に、これらを実践することで、画面越しではあるものの目の前の相手の表情や感情を直感的に感じ取り、知覚した情動に対してそのまま共感することによってどのような形で結びついたかについて、指導教員からコメントがあった。試行カウンセリングが「後期」に入った頃には、話し手の雰囲気や聞き手の雰囲気を合わせることで情緒的交流を行うことや、沈黙が生じたときに待つことで話し手に考える時間を与え、沈黙中の思考と一緒に共有するための問いかけができてきている感覚が筆者のなかに生まれた。しかしながら、オンラインといった画面越しの面接という特性上、話し手の目線や声の大きさ、姿勢、小さな表情の変化などの情報は対面における面接と比べて感じ取ることが難しいといえる。つまり、聞き手が目の前の相手の表情や感情を直感的に感じ取り、知覚した情動に対してそのままの共感をする「他者志向的反応」を行うための情報が少なく、オンライン上における面接では「他者志向的反応」が可能な場面对面における面接と比べて少なかったといえる。仮説1から3では、スーパービジョン経験を通して「初期～後期」の間で大きな効果という効果量が確認されたが、「他者志向的反応」はオンラインにおける面接という要因が影響して「初期」と「後期」のあいだで適度な効果という効果量に留まったと考えられる。

## 5. まとめと今後の展望

本研究は、研究対象者による自己評定を基に分析・考察を行っているため、研究内容がスーパービジョン経験の一般に当てはまるとは言い切れない。今後の研究の蓄積を待ち、本研究から得られた結果および考察の再評価を行う必要があると考える。

### 附言

本研究は、聖泉大学人間学部にも所属する第一著者である若狭和真の卒業論文を元に、指導

教員である第二著者の押岡大覚が加除修正を施したものである。指導教員としては、可能な限り第一著者である若狭の記述・論考を活かすことに努めた。しかし、“学士課程からの公認心理師等心理専門職者養成プロジェクト”のもと、約2年間にわたりゼミ全体で取り組んだ研究であるという性質から、本号所収の別稿【北川・押岡（2023）および吉見・押岡（2023）】との重複表現が散見される。ご容赦いただきたい。一方、論旨等不十分な箇所があることは否めない。ひとえに指導教員としての力不足によるものである。ご助言、ご批判をお寄せいただければ幸いである。なお、本研究は、聖泉大学人間学部卒業研究に係る倫理審査において承認を受けた上で行われた。

### 参考文献・引用文献

- 葉山 大地・植村 みゆき・萩原 俊彦・大内 晶子・及川 千都子・鈴木 高志・倉住 友恵・櫻井 茂男（2008）．共感性プロセス尺度作成の試み．筑波大学心理学研究, 36, 47-56.
- 平木 典子（1997）．カウンセリングの基礎—臨床の心理学を学ぶ 北樹出版.
- 警察庁（2021）「令和2年中における自殺の状況」より  
<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>（2022年12月20日）
- 厚生労働省（2009）「うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル（平成21年度厚生労働省こころの健康科学研究事業『精神療法の実施方法と有効性に関する研究』）」  
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/kokoro/dl/01.pdf>（2022年12月20日）
- 丸山 和昭（2016）．公認心理師法の政策形成・決定過程—日本臨床心理士会の動向を中心に—．名古屋高等教育研究, 16, 133-154.
- 中妻 拓也・サトウ タツヤ（2017）．心理学における共感研究の復興 アメリカにおける心理学, 文化人類学との関連. 日本心理学会第81回大会, 217.
- 中妻 拓也・サトウ タツヤ（2018）．初の共感能力尺度へ至る研究動向—精神分析, 臨床心理学の理論から影響への一考察. 日本心理学会第82回大会, 19.
- Parker, R.I., & Vannest, K.J. (2009) . An Improved Effect Size for Single-Case Research: Nonoverlap of All Pairs. *Behavior Therapy*, 40, 357-367.
- Parker, R.I., Vannest, K.J., & Davis, J.L. (2011) . Effect size in single-case research: A review of nine nonoverlap techniques. *Behavior Modification*, 35(4), 303–22.
- Pustejovsky, J.E., Chen, M., & Swan, D.M. (2022) . Single-case effect size calculator (Version 0.6.1) [Web application]. <https://jepusto.shinyapps.io/SCD-effect-sizes>

- Rogers, C.R. (1942) . *Counseling and Psychotherapy: Newer Concepts in Practice*.  
Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C.R. (1975) . Empathic: An unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist*, 5(2), 2-10.
- 櫻井 茂男・村上 達也 (2015) . 共感性と社会的行動の関係性について—溝川・子安論文へのコメント—. *Japanese Psychological Review*, 58(3), 372-378.
- 竹林 由武 (2021) . シングルケース実験デザインにおける介入効果の評価. *心身医学*, 61(8), 708-714.
- 竹林 由武 (2022) . 認知行動療法研究シングルケース実験デザインにおける介入の有効性評価. *認知行動療法研究*, 48(2), 145-154.
- 山田 剛史 (2020) . 単一事例データのための統計的方法について—効果量を中心に—. *高齢者のケアと行動科学*, 25, 35-55.

